

## 教観相依について

柏 倉 明 裕

### 一、問題提起

天台教学は、灌頂が治定再治する際に、吉蔵のものを依用して成立させたのではないかという指摘がなされている。確かに智顛の預かり知らぬ所で吉蔵のもの引用がなされていることは事実である。そこで問題となるのは、吉蔵の引用文が天台教学全体の中でどのような意味を持ち、何を目的として引用されているかということであり、我々はそのもそもも天台教学の本質的な特徴は如何なる思想であるのかということをも第一に問題としなければならない。

吉蔵のもの引用文は、ある時は南北朝時代の諸師の異説異解の紹介であつたり、語句の説明であつたり、天台教学の本質に直接関わるものではないことは、既にいささか論じた所でもあるが、今回の発表では、何を以て天台教学の特徴とするのかということ念頭に置きつつ、教観相依の持つ意味について考察を行いたい。

### 二、教観相依

観は教によつて導かれ、教は観によつて立つ。正しい教えに基づいた修行と主体的に教えの意味を考えながら深く教法を戴くことが、車の両輪の如く備わるとき、悟りへの完成を期すことができる。これを教観相依とも教観双美ともいう。我々が悟りに近づくためには、自己にとつての教えの意味を深く考え、教えと現実のあり方を比較し、教えによつて自己を照らし、教えを心に刻み実践することがないならば、教法を自らのこととして観達体同し、証得することはできないものである。仏教が学問として成立するには経典や論書に説かれていたことを客観的に分析する姿勢が求められる。しかし、このような一歩突き放して物事を論ずることは、自己を切り離し、自己とは無関係に他人の財宝を数えるが如き行為に陥りやすい。また客観的に判断することがなければ、主体的に法を求める実践行も依り所のない我情による思いつきや思い

込みに陥る危険性がある。このような学問と実践の偏執を正しく導くのが教観相依なのである。『摩訶止観』に

慧淨於行。行進於慧。照潤導達。交絡螢飾。一体二手。更互指摩。非但開拓遮障内進已道。又精通經論。外拓未聞。自匠匠他。兼利具足。人師国宝。非此是誰。(大正、四六、四九、a)

とあるように、教えに基づいた正しい理解は智慧を生じ、その智慧は行を清浄にし、行はさらに智慧を進める。このような智慧と修行、学解と実践は一体の二手のように更互に相兼修しなければならぬ。このことによって障礙が開かれるだけではなく、内には自分なりの道を進むことができ、外には経論に精通し、未聞を拓くことができる。自己を整え、他人を整え、自利利他具足し、この人こそ人師国宝にふさわしいといえるとする。

### 三、智顛の生涯と教観相依

天台実相論の構成のスケールの壮大さは、諸法に対して実相を開顕せんとする意欲の所産であるといえる。智顛の旺盛な真実を求めんとする意欲の至奥には首尾一貫した教観相依という教風があると思われる。

智顛の思想形成の経過を探ってみると、我々は前期と後期に質的な変容を見ることができ、それは般若空観より円融三諦への円熟である。前期時代を代表する講説として『釈禅波羅蜜次第法門』(『次第禅門』)があるが、本書に於いて智顛は

教観相依について(柏倉)

「弁釈禅波羅蜜総撰一切衆行法門」と述べて、禅波羅蜜によって一切の行法の分類総合化を行っている。この禅波羅蜜は、十波羅蜜の中でも特に中心的な役割を与えられ、「行者善修禅故即便成就十波羅蜜。満足万行一切法門。是故菩薩欲具一切願行諸波羅蜜要修禅定」と説かれる。また禅は単に心を静めるだけの働きとしてではなく、「因修禅定具足般若波羅蜜」「非禅不慧。從禅發慧」とあるように、禅は智慧の源として、禅によって智が得られ、智は禅に裏付けられるという関係にある。『釈禅波羅蜜次第法門』は禅波羅蜜という行の徹底によって悟りの実現を目指すということで、行の占めるウエイトの大きいことは否めないが、そこには智慧についての配慮がなされていないわけではなく、禅によって智慧が発こり、智慧は禅に基づくことが説かれている。智顛の前期時代にあつて既に定慧具足の仏教理解は見られ、これは智顛の一貫した仏道姿勢としての特徴を示している。智顛は智慧に裏付けられた実践行によって諸法の真実相を顕らかにし、諸法の真実相を得るために、具体的な行法を整理分類、統撰しており、実相開顕の立場から大小浅深の行法に智慧と禅定に裏付けられた生き生きとした息吹を吹き込んでいたのである。

### 四、慧思の生涯と教観相依

次に智顛の面授に師であり、智顛の前期教学に深い影響を

及ぼした慧思の禅観について見ていきたい。慧思は江東の仏教の義門を重んじ、禅法を侮蔑する風潮に憤りを感じて、定によって慧を発心す定慧双開を鼓吹した。以後、南北朝の禅を行う者でこの定慧双開の教風を受けない者はいなかったと評されている<sup>③</sup>。また『統高僧伝』には『妙勝定経』との出会いが、慧思をして修禅を志す緒となつたことが記されている<sup>④</sup>。『妙勝定経』はおそらく南北朝に中国で撰述された經典で、南北朝の二諦論争や多聞執文の風潮に対して辛辣な風刺を込めて禅定の最妙最勝なることを説く經典である。『妙勝定経』には、多聞義解の者に智慧を勧め、未法時の教界や僧侶の腐敗墮落を肅正する唯一の方法として禅定が説かれ、禅によつて智慧を導き、智慧は禅定を根本とし、定慧具足を理想とする仏道が示されている。

この『妙勝定経』の最も大きな影響を受けたのが慧思であり、その精神を具体的に組織化し大成したのが智顛である。慧思は仏教教団内部の腐敗を是正せんとして衆惡論師に幾度となく毒殺されそうになつており、慧思は禅によつて一切仏法を統攝し、眞の仏法の生命を復活させようとしているのである。慧思の説く禅は智慧を本質とした禅であり、智慧は禅より生じ、禅と智慧は不二なるものとされる。慧思は智慧を本質とした禅によつて、四種安樂行を具足し、衆生も仏と同じ一如なることを明かす。つまり慧思の頓覺説や一乗、如来藏

義は禅を修することによつて導かれており、慧思は一切諸法をして成立せしめる根本として禅定を意義づけているのである。この慧思の仏教姿勢を以て、『智度論』や諸經論に説かれた具体的な行法を整理し、発心より帰大処に至るまでの始終の行位を示して、体系的に大成させたのが智顛である。智顛は定慧具足、教観相依を本質としながら、我々の現前のあらゆる法が三千三諦不可思議実相としてあることを開顯する教を樹立させているのである。

## 五、天台教学の大綱としての教観相依

以前は『天台四教儀』の五時八教を以て天台教学の概論を論ずることが多かったが、関口真大氏によつて、五時八教の名目は天台三大部をはじめとする如何なる講説の中にも見出すことができず、天台大師の所説と異質のものであることが指摘されて以来、何を以て天台教学の大綱とすべきかの必要性を感じざるを得ない。そこで私は教観相依の理念を基本姿勢とする三種教相、三種止観の二本柱が大綱となり得ると思うのである。『法華玄義』に

一大綱三種。一頓二漸三不定。（中略）一約教門解。二約観門解。  
（大正三三、八〇六、a）

とあるように、教門に約して頓教、漸教、不定教の三種教相に対応して、円頓止観、漸次止観、不定止観の三種止観を大

綱とし、教門と觀門の相依相修によつて、我々がそのまま  
不可思議妙としてあることが開顯される。さらに具体的に示  
せば、教門には四門、四教、偏円の峻別、五時等の綱目があ  
り、『法華經』の一仏乗の教えによつて法の開會が示され、迹  
門十妙、本門十妙、相待絶待の開會などの種々の観点から不  
可思議妙のあり方が示され、一切仏法を有機的に総合統撰し  
ている。また、觀門の立場からは、三種止觀、四種三昧、十  
乘觀法、十境などによつて、独自に大乘小乘の各種行法を分  
類整理し、それぞれの行法に則つて一心三觀を修し、一念三  
千、不可思議妙なる実相が開顯されるのである。このような  
教門、觀門の相依相修こそ天台教学の大綱とすべき教説であ  
ると思われる。

しかしこれは一応便宜上、教門と觀門に分けたものであり、  
本来、定は慧を導き、慧は定に基づくもので、定のない慧は  
ありえず、不可分なるものである。定慧は両輪両翼に譬えら  
れるために二者あるかのようなイメージを我々に抱かせるが、  
譬えの意味するところは、両者が等しく一致することによつ  
て悟りへ向うことができるということにある。まして『法華  
玄義』や『法華文句』が単なる『法華經』の教義解釈の書で  
もなく、『摩訶止觀』も単なる実践指南の書にとどまるもの  
でもなく、このように教と觀を二つに分けてしまふことも、  
かえつて天台教学の本質を見失うことになってしまうのでは

ないだろうか。

## 六、教觀相依の持つ意味

天台教学は、既に我々の現前にある一切の存在が、我々が  
自覚している、していないにかかわらず三千三諦の不可思議  
実相としてあることを開顯する。あとは我々がそれをどう受  
け取り、自らのこととして意味を見出し、自らのあり方を觀  
法によつて照らし、いかに顯現するにかかっている。天台  
三大部のいたる所でその道が用意されている。智顛によつて  
体系化された壮大な実相論も、単に教義学としてのみ理解さ  
れたならば、次第に形骸化し、知的関心を満足させる対象と  
しか意味をなさないものとなる危険性がある。それは生きて  
いる自己と無関係で、人間の苦悩の痛みがない文字の羅列で  
ある。智顛自身、学解を超え、突き破つた宗教的な要求に  
よつて、生きた教学を語っている。我々は教觀相依によつて、  
単なる学解による知的関心を突き破つて、智顛の心に触れる  
ことができ、教えを自分の身に当てはめることによつて、一  
人一人に生きた教学が生み出されることとなる。現代に於い  
て、教学を一人一人が個々の問題として身に当てはめ、その  
意味を問い、自らのこととして表現し直すことによつて、時  
代を超えて、教学が本当の意味で生きた思想となるのではな  
いだろうか。いま我々に求められているのは、智顛の教学の

讃仰でも、教学を利用しての知的関心を満足させることでもなく、智顛の説いた教法をして教法たらしめる本質を明かにし、智顛の心に近づくことであり、そのためにも教観相依によつて、教学の一つ一つを自らの問題として問い返し、教えを以て我が身を照らし、我が身の本来のあり方を深く鑑みる必要がある。教観相依こそ普遍的な理論をして自らの問題として問いを提起させる働きを持ち、教学の形骸化を打破し、教学に生き生きとした息吹きを吹き込む原動力となる仏道の歩みであるといえる。

## 七、まとめ

教観相依は、慧思、智顛にわたる一貫した仏法を求める仏道姿勢であり、それぞれの生涯を貫く教風である。ここに我々は天台教学の特徴を見ることができ、三論教学によつて天台教学が成立していると思ふことはできない。また教観相依は天台教学の大綱とすべき思想であるといえる。

我々は教観相依によつて実相を証得すべきが期されておられ、教観相依は、現代に於いても教学の形骸化を打破し、教法を自らの問題として問い、理解しなおすことによつて、教えに生きた息吹を吹き込み、社会問題の本質を照らすものとなる。しかし出世間の法は世俗の本質を照らすものであるが、より良く生きるための処世術を説くものではない。本来、出世間

の法は世俗を超越し、より根源的で、次元を異にするものである。現代社会の限界が見えるとき、生きることそのものが問題となり、自己とは何か、仏法とはどのような意味を持つのかが問題となり、それを教えに問い、それによつてさらに自己や世俗が明かとなる。教えが自己の問題と無関係ならば仏教とはいえず、仏教は自覚の道と無関係であつてはならない。教観相依とはこのような仏道を歩む者の自然な自己確認の姿勢であると思われる。

1 佐藤哲英『天台大師の研究』平井俊栄著『法華文句の成立に關する研究』

2 拙論「灌頂と吉蔵——法華文句——」に見られる吉蔵の引用文について（『印仏研』第四十二卷第一号）、『法華玄義』に於ける天台教学と『法華玄論——教相判釈を中心にして』（『印仏研』第四十三卷第一号）、「智顛と吉蔵の二諦義の一断面」（『印仏研』第四十四卷第一号）

3 大正、五〇、五六三、c、五六四、a

4 大正、五〇、五六二、c

5 『妙勝定経』は、長い間、欠本であつたのを昭和十九年に関口真大氏によつて旅順博物館で敦煌出土の古写経が発見された。詳しくは関口真大氏著『天台止観の研究』附篇「妙勝定経（敦煌出土）考」に原文及び解説がある。

6 関口真大氏編著『天台教学の研究』

（キーワード） 智顛、灌頂、慧思、吉蔵、教観相依

（大谷大学大学院修了）